東北文化学園大学　看護学科　紀要
第11巻　第１号　2022年３月

〔報告〕

COVID-19下での看護学実習における学習活動の実態
－自己評価尺度と質問紙を用いた調査結果－

大池　真樹[1)]，鈴木　祐子[1)]，大槻　久美[1)]，村上　大介[1)]

1）東北文化学園大学医療福祉学部看護学科

要旨

本研究は、COVID-19下での看護学実習における学習活動の実態を明らかにすることを目的に実施した。調査は、「学習活動自己評価尺度－看護学実習用－」（中山ら、2008）と自作の質問紙を用い、A 大学看護学科学生61名を対象として、看護学実習中間時と終了時に Web 形式で実施した。回答数は、中間時42件（回答率68.9％）、終了時33件（回答率54.1％）であった。看護学実習単位数18単位のうち、臨地で実習した単位数は、実習終了時の学生一人当たり５～16単位であった。臨地で実習した単位数の多い群と少ない群、ならびに看護学実習中間時と終了時において、学習活動自己評価尺度の総得点及び下位尺度得点に有意差はみられなかった。しかし、COVID-19下において学生は看護学実習に積極的に取り組み、実習を通して看護への関心が高まり、満足度も高かった。

【キーワード】看護学実習、COVID-19、学習活動、自己評価

Ⅰ．はじめに

2020年２月以降、全国に拡大した COVID-19は看護学教育に大きな影響を与え、臨地実習の実施が困難な状況であった。文部科学省は厚生労働省と共に「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（2020年２月28日および６月１日）」を発出し、実習等の授業の弾力的な取り扱いについて周知し、実習施設の変更や、実習施設の確保が困難な場合に、実情を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等の実施により、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないとし、学士課程において養われる看護実践能力の質的水準の保証が各大学の課題となった（新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書、2021）。

大学の看護師等養成課程の全学年の臨地実習の代替措置（臨地の場以外での教育代替）の実施有無（2020年10月１日時点）では、289課程中40.1％が「すべての科目で実施した」、57.1％が「一部の実習科目で実施した」と報告され（新型コロナウイルス感染症に関連する保健師助産師看護師養成学校における臨地実習等の実施状況調査、2020）、ほとんどの大学が臨地実習を学内実習やオンラインでの代替実施することを経験していた（新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書、2021）。

A 大学看護学科においても COVID-19の影響により、看護学実習を臨地から臨地には赴かず学内で完結する実習への変更を余儀なくされた。そこで、COVID-19下での看護学実習における学習活動の実態を調査し、今後、学生の学習支援に繋げる基礎資料として活用することを目指し研究を実施した。

Ⅱ．研究目的

本研究は、COVID-19下での看護学実習における学生の学習活動の実態を明らかにすることを目的とした。

Ⅲ．用語の定義

本研究において、看護学実習とは、「基礎看護学」ならびに「看護の統合と実践」を除く、成人・老年・小児・母性・精神・在宅看護学実習と定義した。

Ⅳ．研究方法

1．研究協力者

研究協力者はＡ大学看護学科の学生とした。

2．Ａ大学看護学科における看護学実習の概要

Ａ大学看護学科の看護学実習は、６領域全18単位で構成されている。３年次後期から４年次前期に実施され、研究協力者の看護学実習は、2020年８月～2021年１月、2021年４月～８月に実施された。

3．調査内容と方法、期間

調査は、「学習活動自己評価尺度－看護学実習用－」（中山ら、2008）と実習状況に関する自作の質問紙を用い、Ａ大学看護学科の学生61名を対象として、３年次から４年次にかけて行われる看護学実習中間時の2021年２月12日～２月18日と、終了時の2021年８月２日～９月３日にWeb形式で実施した。

「学習活動自己評価尺度－看護学実習用－」は７下位尺度（Ⅰ～Ⅶ）35質問項目から構成され、信頼性・妥当性が確保された尺度である。各質問項目は「非常に当てはまる（５点）」から「当てはまらない（１点）」までの５段階リカート法により尺度化されている。なお、尺度は使用許諾の手続を経て使用した。自作の質問紙の質問項目は、各実習の実習形態、実習に取り組む姿勢（積極性）、看護への関心、実習の満足感とし、実習に取り組む姿勢と看護への関心、実習の満足感は、「非常にそう思う」から「非常にそう思わない」までの４段階で評価した。

4．データ分析方法

データ分析はSPSSを用い、臨地にて実習した単位数によって２群に分け、学習活動自己評価尺度の得点について、Mann-WhitneyのＵ検定、χ二乗検定を用いて比較した。

5．倫理的配慮

研究目的・方法、協力の任意性・匿名性の保障、成績には影響しないことを口頭及び文書で説明し、尺度、ならびに質問紙への回答をもって同意となした。なお、本研究は研究者所属施設倫理委員会の規定に基づき実施した。

Ⅴ．結果

回答数は、看護学実習の中間時42件（回答率68.9％）、終了時33件（回答率54.1％）であった。以下、学習活動の下位尺度を『　』、各質問項目を［　］で示し、調査結果について述べる。

1. COVID-19下での看護学実習の実施状況、および実習への関心・満足度

各学生が履修した看護学実習単位数18単位のうち、実習終了時に臨地で実習した単位数は、学生一人当たり５～16単位であり、中央値は12.0であった。なお、各領域の実習実施状況は図１（n=33）に示す。

実習終了時の実習の取り組みや看護への関心、満足感については、「実習に積極的に取り組めた」「看護への関心は高まった」は全員が、「全体的に満足する内容だった」は93.9％の学生が、「そう思う」または「どちらかと言うとそう思う」と回答していた（表１）。

2. COVID-19下での看護学実習における学習活動の実態

学習活動自己評価尺度の総得点の平均（±標準偏差）は147.8（±16.5）であった。各下位尺度得点の平均はⅠ『経験したことや学んだことを活かしながら、実習目標の達成を目指す行動』19.7（±3.0）、Ⅱ『クライエント（患者や対象者）の持つ問題を解決するために熱心に取り組む行動』22.2（±

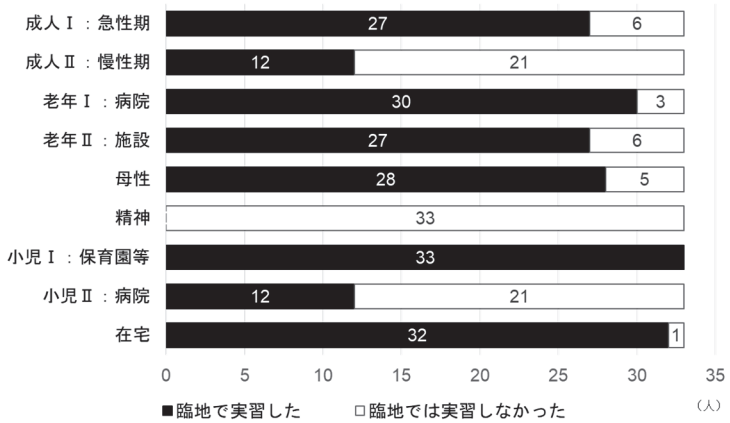

図1．各領域の実習実施状況（終了時、n＝33）

表1．実習の取り組みや看護への関心、満足度（終了時、n＝33）

	積極的に取り組めた	看護への関心は高まった	全体的に満足する内容だった
そう思う	21(63.6)	23（69.7）	14（42.4）
どちらかと言うとそう思う	12(36.4)	10（30.3）	17（51.5）
どちらかと言うとそう思わない	0(0.0)	0(0.0)	2（6.1）
そう思わない	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

人（%）

表2．看護学実習中間時と終了時の下位尺度得点の比較（n＝75）

	中間時　n=42		終了時 n=33	
	平均（標準偏差）	中央値（最小－最大）	平均（標準偏差）	中央値（最小－最大）
Ⅰ 経験したことや学んだことを活かしながら、実習目標の達成を目指す行動	20.7（2.7）	20（14－25）	19.7（3.0）	20（12－25）
Ⅱ クライエント（患者や対象者）の持つ問題を解決するために熱心に取り組む行動	21.8（2.8）	22（14－25）	22.2（2.7）	22（15－25）
Ⅲ 学習の機会をうかがい、それをつかもうとする行動	21.7（2.7）	22（15－25）	21.5（2.7）	21（15－25）
Ⅳ 他の人の技術や態度から模範を見出し、取り入れようとする行動	20（3.4）	20（11－25）	19.7（3.3）	20（13－25）
Ⅴ 状況に応じて学習する立場と援助する立場を切り替える行動	22.3（3.1）	23（15－25）	22.2（2.6）	23（17－25）
Ⅵ 未熟さを自覚して、必要な時に助けを求める行動	21.0（4.1）	22（11－25）	21.4（3.5）	22（13－25）
Ⅶ さまざまな立場の人々と関係を作り、それを維持する行動	21.4（3.1）	22（13－25）	21.1（3.0）	21（15－25）
総計	148.9（17.3）	151（104－175）	147.8（16.5）	146（112－175）

Mann-Whitney の *U* 検定：NS

2.7)、Ⅲ『学習の機会をうかがい、それをつかもうとする行動』21.5（±2.7)、Ⅳ『他の人の技術や態度から模範を見出し､取り入れようとする行動』19.7（±3.3)、Ⅴ『状況に応じて学習する立場と援助する立場を切り替える行動』22.2（±2.6)､Ⅵ『未熟さを自覚して、必要な時に助けを求める行動』21.4（±3.5)、Ⅶ『さまざまな立場の人々と関係を作り、それを維持する行動』21.1（±3.0）であった（表2）。また、最も平均が高い下位尺度はⅡ『クライエント（患者や対象者）の持つ問題を解決するために熱心に取り組む行動』とⅤ『状況に応じて学習する立場と援助する立場を切り替える行動』、最も平均が低い下位尺度はⅠ『経験したことや学んだことを活かしながら、実習目標の達成

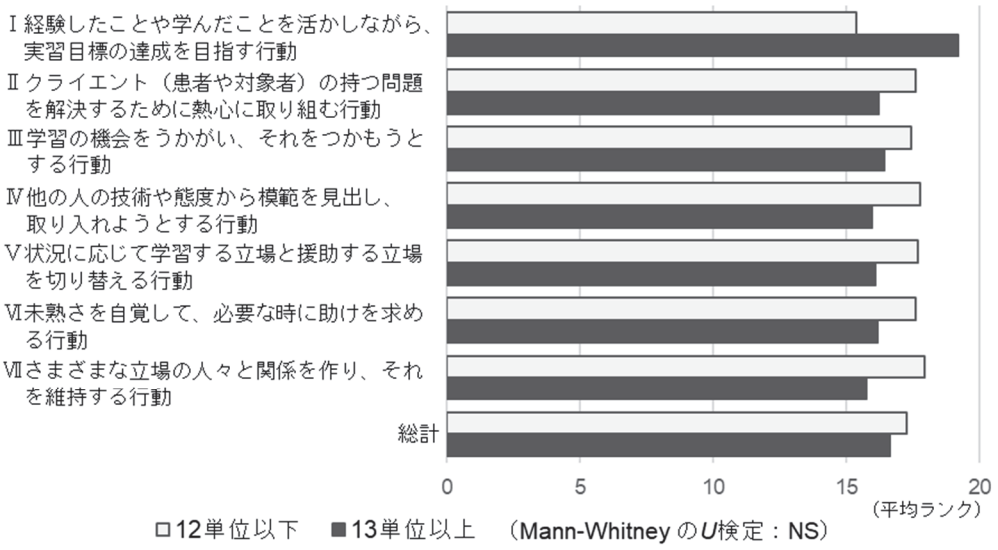

図２．臨地での実習単位数による下位尺度得点の比較（n ＝33）

を目指す行動』とⅣ『他の人の技術や態度から模範を見出し、取り入れようとする行動』であった（表２）。

臨地に赴いて実習した実習単位数の中央値（12.0）を基準にして多い群（n=14）と少ない群（n=19）の２群に分け、学習活動自己評価尺度の総得点及び下位尺度得点を比較した結果、総得点及びⅠ～ⅦIの下位尺度のいずれにおいても有意差は見られなかった（図２）。しかし、臨地での実習が多い学生の得点が高い傾向があった下位尺度は、Ⅰ『経験したことや学んだことを活かしながら、実習目標の達成を目指す行動』、臨地での実習が少ない学生の得点が高い傾向があった下位尺度は、Ⅱ～Ⅶ『クライエント（患者や対象者）の持つ問題を解決するために熱心に取り組む行動』『学習の機会をうかがい、それをつかもうとする行動』『他の人の技術や態度から模範を見出し、取り入れようとする行動』『状況に応じて学習する立場と援助する立場を切り替える行動』『未熟さを自覚して、必要な時に助けを求める行動』『さまざまな立場の人々と関係を作り、それを維持する行動』であった。

実習終了時の各質問項目の学習活動（図３）については、自己評価が高かった項目は、下位尺度Ⅰ『経験したことや学んだことを活かしながら、実習目標の達成を目指す行動』の質問項目［病棟やクライエント（患者や対象者）の情報を１日の行動計画の立案に活かしている］［答えられなかった質問は調べて次の援助に活かしている］、下位尺度Ⅱ『クライエント（患者や対象者）の持つ問題を解決するために熱心に取り組む行動』の［クライアント(患者や対象者)をより深く理解するために話に耳を傾けている］［クライエント（患者や対象者）の生活上の制限を少しでも理解しようと努めている］、下位項目Ⅴ『状況に応じて学習する立場と援助する立場を切り替える行動』の［援助の最中にも看護師・教員の指摘には学習者とし真剣に耳を傾けている］［援助の途中で受けた看護師・教員からの指摘に従い援助を続けている］［看護師・教員から援助を交代する指示された時はそれに従っている］、下位項目Ⅶ『さまざまな立場の人々と関係を作り、それを維持する行動』の［看護師の仕事を妨げないように周囲の状況に注意を払っている］の８項目であり、90％以上の学生が「非常に当てはまる」「かなり当てはまる」と回答していた。

一方、自己評価が低かった項目は、下位尺度Ⅰ『経験したことや学んだことを活かしながら、実習目標の達成を目指す行動』の質問項目［実習では講義で使った教科書やノート・プリントを実際

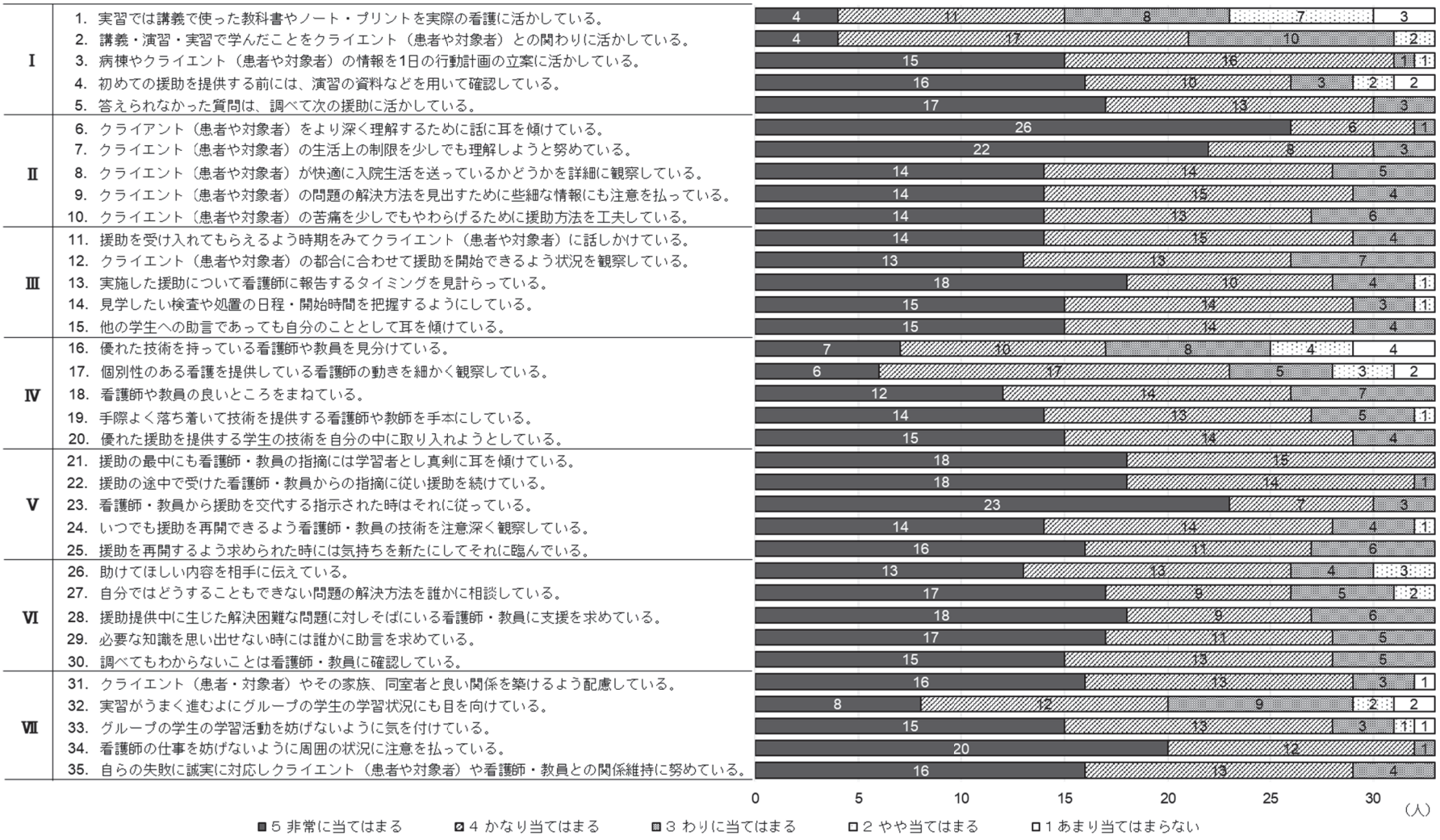

図３．学習活動自己評価（終了時、ｎ＝33）

の看護に活かしている］、下位尺度Ⅳ『他の人の技術や態度から模範を見出し、取り入れようとする行動』の［優れた技術を持っている看護師や教員を見分けている］［個別性のある看護を提供している看護師の動きを細かく観察している］の３項目であり、15 ～ 30％以上の学生が「あまり当てはまらない」または「やや当てはまる」と回答していた。

看護学実習中間時と終了時の学習活動自己評価尺度の総得点及び下位尺度得点を比較した結果、総得点及びⅠ～Ⅶの下位尺度のいずれにおいても有意差は見られなかった（表２）。しかし、下位尺度Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶは実習終了時より中間時の得点が高く、下位尺度Ⅱ『クライエント（患者や対象者）の持つ問題を解決するために熱心に取り組む行動』Ⅵ『未熟さを自覚して、必要な時に助けを求める行動』は実習終了時に高くなっていた（表２）。

Ⅵ．考察

従来は看護学実習全領域において臨地での実習を中心に実施されるが、COVID-19下で、通常と異なり、各学生が履修する看護学実習18単位中、実習終了時に臨地で実習した単位数が各学生５～ 16単位と幅のある中で、学習活動の自己評価調査を実施した。COVID-19下におけるＡ大学看護学科の学習活動の実態について考察を述べる。

学習活動自己評価尺度の総得点の平均（±標準偏差）は、147.8（±16.5）であり、殆どの学生が「学習活動自己評価尺度－看護学実習用－」の中得点領域［122点以上156点以下］にあり（中山ら、2008）、学生は標準的な学習活動が行えていたと評価していた。また、最も平均が高い下位尺度はⅡ『クライエント（患者や対象者）の持つ問題を解決するために熱心に取り組む行動』とⅤ『状況に応じて学習する立場と援助する立場を切り替える行動』であり、学生は通常と異なり学内での実習が多い状況においても、学習者として、かつクライエント（患者や対象者）を援助する立場として、クライエント（患者や対象者）の問題解決に向け熱心に学習に取り組んでいた。

一方、最も平均が低い下位尺度はⅠ『経験したことや学んだことを活かしながら、実習目標の達成を目指す行動』とⅣ『他の人の技術や態度から模範を見出し、取り入れようとする行動』であった。下位尺度ⅠはCOVID-19下以前の先行研究（藤田ら、2015）でも終了時の得点が低い傾向が報告されており、実習が進む中、教科書や講義資料等での知識確認という学習活動への意識が薄くなる傾向があると考察された。また、下位尺度Ⅰは臨地での実習が多い学生の得点が高い傾向にあり、実際の看護場面の遭遇により既習の知識や経験したことを活かすなどの学習活動が促されていたと考えられた。下位尺度Ⅳ『他の人の技術や態度から模範を見出し、取り入れようとする行動』は、臨地での実習が少ない学生の得点が高い傾向にあり、学生は学内実習での模擬患者や技術演習の充実、臨地からの遠隔指導など、学習内容の工夫により、学習活動が促されていたと考えられた。

看護学実習中間時より終了時に高い傾向にあった下位尺度は、Ⅱ『クライエント（患者や対象者）の持つ問題を解決するために熱心に取り組む行動』とⅥ『未熟さを自覚して、必要な時に助けを求める行動』であり、Ａ大学看護学科の学生の多くは、COVID-19下での実習を通して『クライエント（患者や対象者）の持つ問題を解決するために熱心に取り組む行動』『未熟さを自覚して、必要な時に助けを求める行動』が促されていた。

臨地での実習単位数の違いによる学習活動の比較については、臨地での実習単位数により、学習活動自己評価尺度の総得点及び下位尺度得点に違いは見られなかった。臨地での実習単位数は学習活動の自己評価の高低に影響が少ない可能性が示唆される結果となった。COVID-19下で、看護学実習単位数18単位のうち、実習終了時に臨地で実習した単位数が学生一人当たり５ ～ 16単位と、通常と異なり学内での実習が多い中、学生は看護学実習に積極的に取り組み、実習を通して看護へ

の関心が高まっており、そのような積極的な学習態度や看護への関心の高さが学習活動に影響していたと考えられた。

コロナ下での学内実習（対面あるいはオンライン実習）における先行研究では、リフレクションを用いた演習報告（嶋津ら、2021）や、学内実習の学習成果を質的帰納的に分析し、学生間での学びの共有や落ち着いて学習ができるなど学習成果が報告（香川ら、2021）されている。今回、学習活動の自己評価と学内実習の具体的内容との関連については評価していないが、今後、学生個々の学習活動と実習内容を評価し、コロナ下での看護学実習において、学生の実習目標達成への学習活動を支援する実習内容を検討したい。

Ⅶ．結論

1．各学生が履修した看護学実習単位数18単位のうち、実習終了時に臨地で実習した単位数は、４年次生一人当たり５ ～ 16単位であった。

2．COVID-19下で、臨地に赴かず学内で完結した実習が多い中、学生は看護学実習に積極的に取り組み､実習を通して看護への関心が高まり、満足度も高かった。

3．臨地に赴いて実習した実習単位数の多い群（n=14）と少ない群（n=19）、ならびに看護学実習中間時と終了時において、学習活動自己評価尺度の総得点及び下位尺度得点に有意差はみられなかった。

4．学習活動の自己評価が高かった項目は、［答えられなかった質問は調べて次の援助に活かしている］［クライアント（患者や対象者）をより深く理解するために話に耳を傾けている］［援助の最中にも看護師・教員の指摘には学習者とし真剣に耳を傾けている］［看護師の仕事を妨げないように周囲の状況に注意を払っている］等、８項目であった。

5．学習活動の自己評価が低かった項目は、［実習では講義で使った教科書やノート・プリントを実際の看護に活かしている］［優れた技術を持っている看護師や教員を見分けている］［個別性のある看護を提供している看護師の動きを細かく観察している］であった。

6．COVID-19下での実習中の学習活動として学生の多くは、『クライエント（患者や対象者）の持つ問題を解決するために熱心に取り組む行動』『未熟さを自覚して、必要な時に助けを求める行動』を実施していた。

Ⅷ．研究の限界

研究の限界として、実習中の学習活動を学生の自己評価や臨地での実習単位数のみで分析している点が挙げられる。また、看護学実習中間時と終了時において、学生個々を対応させて学習活動の変化を評価していない点、自己評価と各領域の実習実施状況ならびに学内実習の具体的内容との関連を評価していない点も課題として挙げられる。今後、横断的・継続的な調査に向け、実習中の学習活動に影響する要因を再考し、データ収集・分析を行い、実習中の学生の学習活動支援に繋げたい。

謝辞

本研究に協力いただきました看護学生の皆様に感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は2021年日本看護学教育学会第31回学術集会にて発表しました。

Ⅸ．参考文献

藤田三恵、吉川峰子、蔵屋敷美紀（2015）．看護学生の臨地実習における学習活動自己評価の実態と教授活動、日本看護医療学会雑誌、17（1）、12-20.

香川将大、渡邉美和、岡本佐智子（2021）．【COVID-19と教育の新たな試み】COVID-19禍の成人看護学実習Ⅰ（急性期）におけるブレンディッドラーニングの実践報告、東都大学紀要、11（1）号、51-60.

文部科学省「新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告」、2021、（2021/11/3閲覧）.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext_00002.html.pdf

文部科学省「新型コロナウイルス感染症に関連する保健師助産師看護師養成学校における臨地実習等の実施状況調査」、

2020、(2021/11/3閲覧).
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext_00002.html.pdf
嶋津佑亮、船場清三、小原理恵子他 (2021). 【COVID-19と教育の新たな試み】COVID-19禍における成人看護学実習 II の報告、学内・オンライン実習から考える今後の実習の在り方、東都大学紀要、11 (1)、103-108.
中山登志子、舟島なをみ、山下暢子 (2008). 看護学実習のための学習活動自己評価尺度－看護学実習用－の開発、日本看護教育学会誌、18 (1)、1-10.

Status of learning activities in nursing practice under COVID-19 - Survey results using a self - assessment scale and questionnaire -

Maki Ohike [1], Yuko Suzuki [1], Kumi Ohtsuki [1], Daisuke Murakami [1]

1) Department of Nursing, Faculty of Medical Science and Welfare, Tohoku Bunka Gakuen University

Abstract

The purpose of this study was to clarify the current status of learning activities in nursing practice during the COVID-19 pandemic. The survey was conducted using the "Learning Activity Self-Evaluation Scale - For Nursing Practice" (Nakayama et al., 2008) and self-made questionnaires in web format at the midpoint and end of nursing practice among 61 students of the Department of Nursing, University A. The number of participants was 42 at the time of midterm (response rate 68.9%) and 33 at the time of completion (response rate 54.1%). Of the 18 nursing practice credits, the number of credits for field practice ranged from 5 to 16 per fourth-year student. There was no significant difference in the total score and subscale score of the learning activity self-evaluation scale between the group with more and the group with less field practice credits, and between the group at the middle and the group at the end of nursing practice. However, under COVID-19, students were actively engaged in nursing practice, their interest in nursing increased through practice, and their satisfaction was high.

【Key words】nursing practice, COVID-19, learning activities, self-assessment